
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 紫紺の切札 ~

オニキス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 紫紺の切札

【Nコード】

N9553Z

【作者名】

オニキス

【あらすじ】

第13管理外世界。その世界に住むカズマは、自分の居場所を奪った時空管理局に復讐をするため、自らが53枚を束ねる新しい切札となる。しかし、一人の女性との出会いがカズマの運命を変えていく。人間と切札。カズマが最後に選択するカードはどちらか・・・。

切札1：第13管理外世界（前書き）

初作品です。

未熟な文章能力です。

まともなのは、仮面ライダーとなのはに対する愛情だけです。

そんな作者の作品を許せる寛大な方のみご覧ください。

切札1：第13管理外世界

第13管理外世界。ここには魔法が存在せず、基本的な文明や文化も地球と同じ。しかし、生物学だけは異常に発展している。

この世界では、人々が異形の脅威にさらされていた。一人の科学者が生物学のさらなる発展のため、不死身生命体 アンデッド - の封印を解放してしまったのだ。

アンデッドを再封印し事態を終息させるため、ある研究機関はライダーシステムと呼ばれる4つのバトルスーツを開発。そして、4人の青少年がライダーシステムの資格者となりアンデッドの再封印を行っていた。

降りしきる雨と轟く雷。その中に、二つの異形が互いに間合いを取って睨み合っている。

??? 「全てのアンデッドは封印された。残るはジョーカー、お前だけだ！」

そう叫ぶのは、十二種の生物のレリーフがついた黄金の鎧を全身に纏い、カブトムシを模した仮面の戦士、ブレイドキングフォーム（以下BK）。

黒い全身に所々に緑のライン。刺刺しい右半身のカミキリムシに酷似した異形にBKは「重醒剣キングラウザー」を構える。

ジョーカー「あああああああああ！！」

ジョーカーと呼ばれた異形は、すさまじいオーラを発し鎌の形をした短剣を手に、BKに切りかかる。

ガキン

BK「はああああああ。ウェイ！」

BKはジョーカーの攻撃をキングラウザーで防ぎ、すかさず渾身の右ストレートを放つ。

BKの攻撃により吹き飛ぶジョーカー。

BKは鎧の5か所のレリーフから5枚のカードが出現させ、それを手に取りキングラウザーに読み込ませる。

「スペード10・J・Q・K・A　ロイヤルストレートフラッシュ」

BKは自身の最強の必殺技、ロイヤルストレートフラッシュを発動。莫大なエネルギーを剣に纏わせ、ジョーカーを切りつける。

そのエネルギーにより大爆発が起こる。そしてジョーカーは地面に倒れこみ、全く動かなくなる。

トランプ型のカード、ラウズカードを投げるBK。

アンデッドはいかなる手段でも、どんな攻撃を受けても死なない。
行動不能状態にはなつたところでラウズカードに封印する。それが
唯一の対処方法である。

カードに吸い込まれるジョーカー。
それを手にするBK。

この瞬間、全53体のアンデッドの封印に成功。アンデッド事件が
終わりを告げる。

しかし、この世界には間もなく新たなる脅威が訪れる。
そして、一人の少年の運命が大きく歪むことになる。

切札1：第13管理外世界（後書き）

小説が、戦闘描写がこんなに難しいとは。

ジョーカー叫んでるだけじゃん。ジョーカーファンの方、ごめんなさい。

ジョーカーの力は主人公が受け継ぎますのでご了承ください。

誤字脱字。未熟な作者へのお叱りの言葉、お待ちしております。

オリジナル主人公（前書き）

随時更新していきます。

主人公の外見は「ブレイドの世界」の剣立カズマを幼くした感じ
です。

更新（2011/12/31）

オリジナル主人公

名前：カズマ

性別：男

外見年齢：17歳（アンデッド化により年齢という概念が無くなった）

出身：第13管理外世界（通称ボード）

性格：本質は明るく優しい

13歳で人類基盤研究所の研究員・スペードのライダーシステムに選ばれた天才。アンデッド事件ではブレイドとして戦った。研究所の唯一の生き残り。

管理外世界で育ったが襲撃した魔導師を調べるうちに、ミッドチルダ・魔法・時空管理局の存在を突き止める。

未熟な次元渡航能力により機動六課の屋外訓練場に偶然たどり着き、自主練中だったフォワードメンバー4人に自身の能力の腕試しとして戦闘を仕掛ける。

高い身体能力とアンデッドの力でフォワードメンバーを圧倒。

しかし、駆け付けた高町なのはとの戦闘になると一転。「スターライトブレিকা」と「ロイヤルストレートフラッシュ」の打ち合いとなり、その時の攻撃の余波で敷地の外に吹き飛ばされる。

コンボの反動で戦闘不能状態になり、撤退をするが途中で力尽きる。
海岸で倒れている所、トレーニング中だったノーヴェと出会う。

EX エクストラ ジョーカー

カズマが53体のアンデッドの遺伝子と融合した新しいジョーカー。
外見はオリジナルの緑の部分が青くなっただけ。

オリジナルのように他のアンデッドの姿には変身できないが、53
枚のラウズカードを所有しているため戦闘力は高い。
しかし、元が人間なのでスタミナが低い。

カズマはこの力を管理局への復讐に使うつもりだったが、ノーヴェ
と出会いで変化の兆しが見える。

オリジナル世界と仲間

第13管理外世界（通称ボード）

基本的な文化、文明は地球と同じ。
生物学だけは異常に発展してる。

ある科学者が、不死身生命体・アンデッドの封印を解く事件（アンデッド事件）が発生するも、4つのライダーシステムによりラウズカードへの再封印に成功。

管理局の最高評議会はこの不死の力に興味を持つ。

人類基盤研究所

第13管理外世界における最高レベルの研究所。ライダーシステムの開発、ラウズカードの管理もここで行われていた。

最高評議会はラウズカードを奪うために魔導師を送り込むが、4人のライダーとの戦闘により作戦は失敗。

ラウズカードは守りきるが研究所は壊滅、カズマ以外の研究員も死亡する。

ライダーシステムの適合者

サクヤ（享年33歳）

ダイヤのライダー・ギャレンに変身して戦っていた。4大ライダーのリーダー格。

カズマにとっては父親のような存在。

ハジメ（享年33歳）

ハートのライダー・カリスに変身して戦っていた。

サクヤ同様、カズマにとっては父親のような存在。

ムツキ（享年23歳）

クラブのライダー・レンゲルに変身して戦っていた。

カズマにとっては良き兄貴分。

武器・コンボ・能力（前書き）

渡航能力や単体技の詳細を加えました。

（2011/12/31）

武器・コンボ・能力

武器

EX>エクストラ<ラウザー

カズマが魔道師のデバイス調べ、そのデータを元に開発した専用武器。イメージは、キングラウザーの金の部分が青くなったもの。普段は待機モード（ジョーカーラウザーの形）としてベルトのバックル部分に取り付けられており、戦闘時に取り外して起動させる。

次元渡航能力

待機状態のラウザーに手をかざしてエネルギーを注入。あらかじめ設定した座標にある次元世界に自身を転送させる。転送のメカニズムやミッドチルダの座標は、13人の魔導師のデバイスのデータを解析し、そのデータを元にEXラウザーに組み込んだ。

天才・カズマといえど、所詮魔法とは無縁の人間の独学によるものであり、その精度はミッドチルダからすればかなり低い。

設定できる座標は「世界」であり「その世界の特定の場所」までの情報はインプットできない。

「切札4」でティア達の前に転送されたのは只の偶然であり、本来は転送された場所から魔導師や関係施設を探しをするつもりだった。ある意味で運が良く、ある意味で運が悪かったといえる。

コンボ

ファイブカード

4枚のAとジョーカー（黒）を使用。詳細不明

ロイヤルストレートフラッシュ

原作同様スペードの10・J・Q・K・Aを使用。エネルギーを剣に宿して切る、又は放出する。

威力はSSSランクを凌駕する。使用後は強制的に人間に戻り3時間ほど戦闘不能状態になる。

他のスートでも使用できるが、カズマはスペードのみ使用。

ストレートフラッシュ

各スートの2・3・4・5・6を使用。原作とは違い、EXラウザーのみで切る、又はエネルギーを放出する。スペードは雷、ダイヤは炎、ハートは風、クラブは氷属性の技となる。

威力はSランクに匹敵。消費は激しいが戦闘不能状態にはならない。コンボと能力の使用は不可。

フォーカード

原作同様、各スートの6とスペードのKを使用。雷、炎、風、氷属性のエネルギーを剣に宿して切る、又は放出する。

威力はAAAランクに匹敵。上記の技より消費が軽く、使用後もコンボや能力の使用が可能。

能力

原作のKフォーム同様、単体ならラウズせずにアンデッドの能力を発動できる（例：スペードの5「キック」＝強化キック）。エネルギーをほとんど消費せず、戦闘時はこちらがメインとなる。

使用するカードの名前を頭で考えれば自動的に発動。その際、ラウザーからカード名が発せられる。

威力は2〜5がA+ランク、6〜10がAA-ランクに匹敵。

J・Q・K・Aは単体で使用しても効果はない。普段はEXジョーカーの身体能力のエネルギー源となっている。

切札2：組織壊滅（前書き）

仮面ライダー剣の第1、2話の脚本タイトルと同じです。

当時、橘役の天野さんはタイトルを見て「え！？いきなり」と思ったそうです。

誤字脱字を修正しました。まだ有りましたらご連絡をください。

（2011/12/31）

会話させるのって難しい。他の小説を参考にしているのですが、うまくいかない。

切札2：組織壊滅

カズマ side

第13管理外世界

人類基盤研究所のとある一室。

少年がパソコンと資料と分厚い本に目を通している。

画面や紙面に表示されている内容は、専門用語や複雑な数式のオンパレードで、素人には理解不能である。

カズマ「う〜〜〜っと」

少年は疲れたのか思いっきり背伸びをする。

少年の名はカズマ。現在15歳。

13歳でこの世界の最高レベルの大学を飛び級の首席卒業、人類基盤研究所にスカウトされた天才である。

かつて、この世界は一人の科学者が不死身生命体・アンデッドの封印をとき、人々は脅威にさらされていた。その対抗策、ライダーシステムの適合者としてもスカウトされたのだ。

サクヤ「少しは休め。無理しても効率は下がるだけだぞ。」

カズマ「サクヤさん。」

カズマが振り向くと、30代の男性が缶ジュースを彼に渡した。

男性の名はサクヤ。カズマと同じく研究員でライダーシステムの適合者である。

カズマにとっては父親のような存在であり、サクヤも実の息子のようにかわいがっている。

サクヤ「今日はその辺にして、これから飯でもどうだ？ハジメやムツキもさそって」

ハジメもムツキもまた、ライダーシステムの適合者である。

ハジメはサクヤと同じく父親、ムツキは兄貴分としてカズマの面倒をみている。

カズマ「いいですね。行きましょう。」

カズマは、渡されたジュースを飲み干すと、パソコンの電源を切りサクヤと共に部屋を後にする。

アンデッド事件が集結して半年。事件の爪痕は残っているが、人々は、4人のライダーは平穏な日々を過ごしていた。異世界からの脅威が待ち受けていることを知らずに……。

カズマ side out

最高評議会 side

時空管理局のとある一室。

暗闇の中、三つの声が話をしている。姿は見えないが、声からして

3人の男性だとわかる。

男1「アンデッドとかいう不死身生命体。全て封印されたようだが、非常に興味深い」

男2「魔法の無い世界としてしか見ていなかったが。これだけは使えそうだ。」

男3「うまくいけばスカリエッティよりも役立つだろう。すぐに魔導師を送り込む。」

最高評議会 side out

カズマ side

ブレイドキングフォーム「はあはあ・・・こいつらいったい？」

ブレイドキングフォーム（以下BK）に変身したカズマは、肩で息をしながら目の前の状況を理解しようと必死だった。

突如、研究所を襲撃した謎の13人の人間。アンデッドでもライダーシステムでもない。それでも空を飛び、謎の攻撃（魔法を知らないカズマには他の表現ができない）によってライダーシステムを破壊され、絶命したサクヤ、ハジメ、ムツキ。

確かなのは、奴らの狙いがラウズカードであること。奴らが、自分

の大切な人の命を奪ったことの2つ。

魔導師「さて、いい加減君にも退場を願おう」

13人の襲撃者も、ライダーとの戦闘で4人にまで減っていた。4人がBKに一齐攻撃の態勢に入る。

BKといえど、これ以上の攻撃には耐えられない。

BK「うあああああああ!!」

「スピード10・J・Q・K・A　ロイヤルストレートフラッシュ」

BKもロイヤルストレートフラッシュを発動させる。

巨大なエネルギーがぶつかり、その余波が周囲を襲う。

剣が、装甲が破壊されていく中、カズマは意識を失った。

カズマ「……!!」

カズマが目を覚ました時、そこにあっただのは信じられない光景だった。

カズマ「嘘だ……」

・ 苦楽を共にしてきた研究員の亡骸 ・

カズマ「うそだ・・・」

- 共に死線を潜り抜け、公私を支えてくれた先輩たちの亡骸 -

カズマ「ウソダ・・・」

- 瓦礫と化した研究所 -

カズマ「ウソダコンナコトオオオオオ！！！！」

瓦礫の山の上で

あふれる悲しみの中

カズマはただ一人叫んでいた。

切札2：組織壊滅（後書き）

こんな出来で申し訳ありません。

最高評議会の会話のシーン。もっとカッコいい悪役台詞にしたかったのですが。
もっと、修行しなければ。

カズマ達を襲撃した13人の魔導師は、全員がAAAランクです。
近いうちに詳細設定を書きます。

切札3：新たなる切札（前書き）

タイトルが「なのは」なのに、なのはが全く登場しない。
ホントにごめんなさい。

次から、なのは達がカズマと戦います。

切札3：新たなる切札

最高評議会 side

魔導師とライダーとの戦闘が終わった翌日。

明りのない部屋で、あの3人の男たちが話し合っていた。

男1「『13人の魔導師』が全滅するとは」

男2「だが、ライダーシステムはもう無い。今なら」

研究所の壊滅、ライダーシステムの全滅により『今なら』カズマから、ラウズカードを奪うのは簡単である。しかし、

男3「いや、ラウズカードはもういい。所詮、魔法のない世界の力。これ以上、戦力を投入して今すぐ手に入れるほどのモノでもない。」

男1「スカリエッティに研究を進めさせる。ラウズカードはその後でいい。」

男たちは、ラウズカードの入手を一時中止。別の計画を進めることにする。

この時、カードを奪っていれば歴史は変わっていたのだろうか？

スカリエッティの裏切りにより、自分たちが抹殺されるのはもう少し先の話。

最高評議会 side out

カズマ side

カタカタカタカタ・・・カチ。

カズマ「よし。これで残るは」

魔導師の襲撃を受けてから2年。カズマは17歳になっていた。現在、彼がいるのは人類基盤研究所の地下13階である。研究所は万が一に備えて、予備の研究施設と全てのバックアップデータを地下に保存していたのだ。

カズマ「皆。俺はもう『そっちに行けないけど』敵は取るから」

そう言つて、カズマはスイッチを入れる。

その瞬間スーパーコンピューターがフル稼働し、カズマに莫大なエネルギーが注入される。

カズマ「っ！！！！！！！！」

悲鳴にすらならない激痛がカズマを襲う。

カズマは襲撃を受けてから2年間、襲撃者について徹底的に調べた。本来であれば、魔法の無い世界の住人では何もできない。

しかし、襲撃者の武器、襲撃者が現れた場所を調査して得た情報、そして天才的頭脳によって彼は突き止めた。魔法を、時空管理局を、次元世界と渡航方法を。そして、敵の中心がミッドチルダという次元世界にあることを。

本来なら、渡航方法を開発した時点で、すぐにでもミッドチルダに行きたかった。

しかし、それでは奴らには勝てない。自分たちが戦った魔導師は、かなりの実力者だったようだが、彼ら以上の魔導師が存在している可能性も十分にある。

勝つための力。ライダーシステム、Kフォームを凌ぐ究極の力。

彼が行き着いた答えは、『全53体のアンデッドとの融合』だった。

カズマ「がああああああああ！！！！！！」

叫びと共に莫大なエネルギーが放出され、まわりの機材は全て破壊される。

土煙の中から出てきたのは、かつて彼が封印した最強のアンデッド、ジョーカーに酷似していた。

唯一の違いはオリジナルの緑の部分が青くなっていること。

この瞬間、53体のアンデッドの遺伝子を持つ『新しい切札』が誕生した。

その名はEX エクストラ ジョーカー

EXジョーカー「さよなら、皆」

そういつて、周囲の機会を完全に破壊し、驚異的な跳躍力で地上に出るEXジョーカー。

EXジョーカー「待っている、時空管理局」

そう言つて、EXジョーカーはベルトのバックルに両手をかざしエ
ネルギーを集約。

次の瞬間、その体は青い光となつて異次元へと消えていく。

青年は自らを異形に変え、故郷を捨て、ミッドチルダを目指す。

切札3：新たなる切札（後書き）

この作品のヒロインはノーヴェエです。

なのはすら出てきてないのに、何言ってるのこイツとお思いでしょう。

でも、ノーヴェエをヒロインとして設定やストーリー構成をしていますが。

（ だったら、せめてスバルがギン姉ぐらい出せよダメ作者！ ）

ノーヴェエの登場は次回からです。

13人の魔導師(前書き)

全員同じ設定です。

所々あった誤字を修正しました(2011・12・31)

13人の魔導師

名前：「13人の魔導師」

（各個人に名前は無い。戸籍も抹消され、常に13人で任務を行うのでこのように呼ばれている）

魔道士ランク：空戦AAA-

所有デバイス：ストレージデバイス（通常のモノよりも処理速度は遥かに速い）

所属：最高評議会

出生：児童養護施設から魔法資質の高い子供を拉致監禁。違法実験により強化、教育により誕生。

備考

最高評議会が操る魔導師集団。管理局でもその存在は噂されていたが、詳細を知る者はいない。

出会ったが最後、確実に抹殺されるからである。

個々の戦闘力も高いが、真に恐るべきは徹底した集団攻撃。

半数が防御魔法やバインド、誘導弾により相手の動きを封じ、残りが超火力砲撃魔法で仕留める。

戦法こそシンプルだが、個々の高い能力と特別性デバイスによる高速処理により

超高速の魔法戦を展開し、Sランク以上の魔導師さえ抹殺してきた。

4つのライダーシステムとの戦闘で全員死亡。

ラウズカードの入手には失敗したものの、カズマ以外のライダーと研究員の抹殺、人類基盤研究所とライダーシステムの完全破壊など、その強さは本物。

過去にも2、3人が死亡するケースは多々あり、そのたびに補充をしていた。

全滅したのは今回が初めてであり、最高評議会にとって大打撃となる。

最高評議会は「また作ればいい」と言っているが、内心かなり焦っている。

切札4：魔導師VS切札（前書き）

ラウザーの設定に次元世界への渡航法を加えました。
単体技についても、威力と発動法を加えました。

切札4：魔導師VS切札

フォアアードside

〈機動六課・屋外訓練場〉

雨の中、4人の少年少女+ が何かを話し合っていた。

オレンジ色の髪をツインテールにしている女性、ティアナ・ランスター。

彼女がリーダー格なのか、中心となって話を進めている。

青髪のシヨウトヘアの女性、スバル・ナカジマ

赤髪の短髪少年、エリオ・モンディアル

ピンク髪のシヨウトヘアの少女、キャロル・ルシエ
彼女の使役する白い小型の龍、フリードヒリ

彼女らは現在、悪天候における戦闘パターンの確認をしている。

JS ジェイル・スカリエツィ 事件が解決し、
試験導入された機動六課も解散の日が近づいていた。

解散後も、それぞれの進路先で様々な任務が待ち受けている。
そのために彼女らは、平穏な中でも日々訓練を行っていた。

ティア「それじゃ、始めるわよ」

スバル・エリオ・キャロ「OK！（はい！）」
フリード「きゅくう」

確認が終了し、各自デバイスとバリアジャケットと展開。
訓練を開始しようとしたその時
彼女たちの目の前に青い発光体が舞い降りた。

フォアードsideout

EXジョーカーside

青い光が消え、そこには一体の異形が立っていた。
黒い全身に青いライン、そして刺刺しい右半身。
その姿はカミキリムシに酷似している。

スバル「ティ、ティア。何なのアレ？」

ティア「分かるわけないでしょ。分かるのは明らかにヤバい奴って

だけ！」

突如出現した禍々しい異形。

フォーワードメンバーに混乱が起こる。

それを無言で見つめるEXジョーカー

EXジョーカー（こいつらも魔導師か？）

かつて、自分が戦った魔導師とは武器も服装も違う。

何より実力が違う。目の前にいる少女達は、それなりに強いようだが奴らには及ばない。

そして異形を目の前にして先制攻撃をするわけでも、防御態勢に入るわけでもなく、事態を理解しきれず混乱していた。

EXジョーカー（実力は有るが経験値が低いつてことか。腕試しにはちょうど良い。）

管理局の全容を把握しきれない現在、目の前の魔道士は腕試しにはちょうど良い。

そう判断したEXジョーカーは、バックルから待機状態のラウザーを取り外し機動させ、大剣型の専用武器「EXラウザー」を手にして構える。

ティア「デバイス！？皆！」

スバル・エリオ・キャロ「！！！！！！」

未熟とはいえ死線を潜り抜けてきた4人は、混乱の中でも敵が攻撃態勢に入ったことを理解し、迎え撃つためにディバイスを構え戦闘態勢を取る。

しかし

「MACH」

フォアード「くくくえっ!?」「」「」

EXジョーカーが所有する53枚のカードの1つ、?9を発動。
ティアの目の前に高速移動して

ティア「がはっ!」

ティアの腹に左足でキックを放つ。

防御できなかったティアは、諸に受け数メートル吹っ飛ばす。

スバル「ティア!このおっ!!」

エリオ「はっ!!」

スバルはリボルバーナックルでの右ストレート、エリオはストライダで切りかかるが

スバル・エリオ「そんな」

EXジョーカーは左手でリボルバーナックルを、右手のEXラウザーでストライダを受け止める。

EXジョーカー「るあっ!!」

スバル・エリオ「ごほっ!!」

EXジョーカーはスバルを左の裏拳、エリオをEXラウザーの柄の部分で殴り

「THUNDER」

?6を発動させ、雷を纏った剣でスバルとエリオに切りかかる。

二人は防御魔法を発動するが、パワーに圧倒されそのまま吹き飛ば

キャロ「フリード!!」

自身の魔力を注入し、フリードの口から火炎砲が放たれ

ティア「ヴァリアブルバレット」

ティアも蹴られた部分を抑えながら射撃魔法を放つ。

「REFLECT」

EXジョーカーはその場を動くことなく?8を発動。バリアを発生させ攻撃を跳ね返し2人に命中する。

高出力攻撃が仇となり、その場に倒れこむ。

EXジョーカー「ウウアアアアアアア!!」

叫びと共にすさまじいオーラを発する。

そのオーラと僅かな戦闘で圧倒され、4人は敵との力の差を理解してしまふ。

その時

なのは「そこまでだよ」

栗色の髪の毛をサイドポニーにした、白服の女性が空中からEXジョーカーにデバイスを向ける。

なのは「デバライインバスタアアア!!!」

桜色のエネルギーがEXジョーカーに放たれ

EX「!?!?ぐあああああ!!!」

ラウスカードの能力の発動が間に合わず直撃を受ける

なのは「皆、大丈夫?」

フォワード「はいいい」

ティアはキャロを、スバルはエリオを抱きかかえ地上に降りたなのはの元に集まる。

高町なのは

時空管理局の魔導師の中でも屈指の実力者。

現在は機動六課スターズ部隊の隊長兼教官でもある。

自主練の様子を見に来たところ

フォワードメンバーが謎の異形と戦闘し、圧倒されているところに

遭遇。

彼女らを救うべく異形に砲撃魔法を放った。

「FIRE」

直撃を受け、吹っ飛んだEXジョーカーは体制を立て直し？6を発動。

火炎弾をなのはに放つ。

なのははフォワードの前に立ってシールドを展開。攻撃をカードする。

エリオ「雷だけじゃなく炎まで!？」

先ほど雷属性攻撃を行ったEXジョーカーを、エリオは自分と同じ雷の魔力変換資質を持つ生命体だと思った。魔力変換は、一人につき一つの属性が基本であり、複数の属性は非常に稀である。

そのため、雷以外に炎属性の攻撃を行ったEXジョーカーに驚きを隠せない。エリオ以外のフォワードメンバーも同じ考えである。

もともとEXジョーカーは魔道師ではないのだから、魔法が当たり前の世界に身置く人間には、異能≡魔法という考えが浸透しきっている。

なのは「レイジングハート」

レイジングハート「オーライ、マイマスター」

なのはのインテリジェントデバイス、レイジングハートがカードリ

ツジを3発消費。大技の発動に入る。

なのは「皆、離れて」

JS事件を解決し成長したフォアードメンバーを圧倒。

自分の砲撃を諸にくらい、それでもすぐに反撃をしてきた謎の異形。一気に制圧する必要があると判断するなのは。

フォアードメンバーもなのはの考えを理解し、攻撃に巻き込まれないようなのはから離れていく。

なのは「全力：全開!!!」

先ほどとは比べ物にならないエネルギーが集約される。

EXジョーカーは、単体技では防ぎきれないと判断。

五枚のラウズカードを取り出す。

なのは「スタアアライトオオオ」

「スピード10・J・Q・K・A　ロイヤルストレートフラッシュ」
カードをEXラウザーに読み込ませるEXジョーカー

なのは「ブレイカアアアアア!!!」

EXジョーカー「ルアアアアアアア!!!」

ズドオオオオオオオオオオ!!!

桜色と青色の莫大なエネルギーぶつかり合う

EXジョーカー「ウツ…グウアアアアアア」

その衝撃で機動六課の敷地外に吹き飛ぶEXジョーカー

カズマ「まずい！」

人間体になってしまったカズマ。

素顔を見られれば面倒なことになる。

傷口から流れる緑の血

土煙で今は自分を見失っているだろうが、雨ですぐに煙がはれる。

追手が来る前にここを離れなければ。

幸い雨で血痕も流れ匂いも消える。

カズマ「今回は…これで良しとするか」

ティアナ達を圧倒した時点で、施設の破壊とそこにいる魔導師の抹殺も考えた矢先、思わぬ実力者との遭遇。撤退するのは癪だが、相手の切札の一端を知ることができた。

技の反動で激しい疲労に襲われる体を動かし、カズマは機動六課を離れるのであった。

その日、一体の異形が機動六課に少しの混乱と不安を与えた。

EXジョーカー side out

??? side

ミッドチルダ・海岸沿い

???「しつかりしろ、大丈夫か?おい!」

カズマ「はっ!」

自分に語りかける女性の声に反応し、目を覚ますカズマ。
しかし

ガン!!

カズマ・???「いつてええええ」

互いの距離が近かったようで、互いに思いっきり頭をぶつける

???「何すんだよ!!」

女性は涙目で痛めた個所を抑えつつ、カズマに掴み掛る。

カズマ「えっ?あ、えつとごめん。てゆうか誰?」

戸惑いつつもとりあえず謝罪し、名前を尋ねる。が

ノーヴェ「あたしはノーヴェ・ナカジマ。っておい!」

名前を聞いておきながら、間合いを取りファイティングポーズを構

える青年に、ノーヴェはムットする。

ノーヴェ・ナカジマ

後に彼女が、カズマの狂った運命を変えていくことになる。

しかし、二人の出会いは波乱の状況で始まったのだった。

切札4：魔導師VS切札（後書き）

一つのストーリーで、理想の文字数は何文字なのでしょう？
アドバイスがありましたらお願いいたします。

最後に、カズマがファイティングポーズ（仮面ライダー THE
FIRSTの1号のポーズを想像ください）を取ったのは、ノー
ヴェとスバルを見間違えたからです。
剣崎一真の早とちりな部分を受け継がせてみました。

切札5：ノーヴェの災難（前書き）

新年おめでとうございます。

元副会長様

ご意見をいただき、ありがとうございます。

ご指摘の通り、設定を生かせない文章力でお恥ずかしい限りです。元副会長様を始め、他の作家さんを参考に日々精進していきます。これからも、ご指摘やお叱りの言葉を頂ければ幸いです。

切札5：ノーヴェエの災難

（ミッドチルダ・海岸沿い）

カズマ s i d e

ここには現在、女性に対しファイティングポーズを構える青年とそれに対し、不機嫌さ全開の女性という奇妙な光景がある。

カズマ（アンデッドのくせに倒れるとは情けない。しかし、もう追手がくるとは）

必殺技の反動でカズマは凄まじい疲労感に襲われた。

その体を引きずって少しでも機動六課を離れようとするも海岸で力尽き、

そこを目の前の女性に起こされたようだ。

自分が襲った女性に（カズマの勘違い）

ノーヴェエ「オイ！人に頭突きして、いきなり喧嘩の構え取ってんじやねえ！人の名前聞いたんなら聞け！そしてオマエも名乗れ！」

倒れている所を助けようとしたのにいきなり頭突きされ、おまけに何故かファイティングポーズまでとられ、怒りを顔にするノーヴェエ。

彼女の名はノーヴェエ・ナカジマ。

カズマが襲ったフォアードメンバーの一人、スバル・ナカジマの妹。二人は容姿が非常に似ており、違いといえば、青髪のスバルに対しノーヴェエは赤髪であるということぐらいだ。家族や知人なら他にも

違いをよく知っているのだが、初対面だと双子と勘違いする者もいる。

そのためカズマは、スバルが自分を追ってきたものだと思い込み、攻撃の構えをとっているのだ。
しかし、

カズマ（…よく見ると髪の色が違う。別人？）
冷静に見ると自分が襲った者とは別人であることが分かる。

勝手に勘違いをして勝手に冷静になるカズマ。ノーヴェの怒も右から左。

カズマ「すまなかった。人違いだ。」
構えを解いて謝罪し、その場を去ろうとする。

そこえ、

ノーヴェ「だ…かあ…らあ…、話を聞けえ!!!」
元々短気な性格のノーヴェ。

尋ねておきながら話を聞かず、その場を去ろうとするカズマに怒りが爆発。

渾身のとび蹴りをカズマに放つ。

カズマ「ごぶばあ!？」

攻撃を諸に受け、吹っ飛びそのまま倒れる。

ノーヴェ「どうだこの野郎。話を聞く気になったか!」

見事な蹴りを食らわせたノーヴェは、カズマに人差し指を向け言い

放つ。

しかし、カズマは倒れたまま動かない。

ノーヴェ「…？どうした、そこまで強く蹴ってないぞ？」

ノーヴェは自分の『普通じゃない力』をよく理解している。

どんなに腹が立っても、見ず知らずの一般人を全力で蹴るほど野蛮でも愚かでもない。そのため、いっこうに起きないカズマが心配になり駆け寄る。すると、

カズマ「ZZZZZZ…」

眠っていた。

ノーヴェ「なっ…なんなんだよコイツorz」

変な奴に関わってしまった。

怒りを通り越し、困惑するノーヴェであった。

カズマ side out

〈機動六課・会議室〉

はやて side

はやて「一体何なん、この怪物？」

関西弁を話す女性は、八神はやて。

機動六課の設立者であり、部隊長。なのはの幼馴染でもある。

フォワードメンバーのデバイスと監視カメラに記録されていた、EXジョーカーを観て率直な感想を上げる。

シグナム「高速移動に、ティアとフリードの攻撃を同時に反射するシールド、そして雷と炎の攻撃。デタラメとしか言いようがありません。」

そう答えるのは、はやてを守る守護騎士の一人、シグナム。

カズマがEXジョーカーとなり、なのはやフォワードメンバーと戦った後、機動六課には混乱が起こっていた。突如起こった大爆発。駆け付けると、そこには怪我を負っているティア達。そして、愛機のレイジングハートが損傷しティア達以上に怪我をして気を失っているのは。

すぐに消火活動が行われ、なのは達も病院に運ばれた。その時、テ

イア達から謎の生命体が突如現れ、戦闘になったことがはやてに伝わり、現在、残された映像を元に緊急会議が開かれている。

スターズの副隊長でありシグナムと同じく守護騎士の一人、ヴィータ・ライトニングの隊長であり、はやてやなのはの幼馴染フェイト・T・ハラオウン

本来はこの2名も参加するところだが、なのは達のお見舞いと、ティア達から当時の詳しい事情を聞くため病院に向かつており不在。会議に参加しているのは、はやて、シグナム、そしてデバイスマスターのシャリオ・フィニーノ（通称シャーリー）の3名となっている。

残りのメンバーは、現場の後片付けや謎の生命体に関する手掛かりを捜索中である。

シグナム「シャーリー、そっちは何か分かったか？」

映像からEXジョーカーの能力分析をしているシャーリーに問いかける。

シャーリー「はい。まず、ティア達との戦闘で使った能力ですが、魔力で『例えると』どれもA〜AAランクに匹敵します。」

分析が終了し答えるシャーリー

はやて「『例える』ってどういうことや？」

「魔力」と言い切らない言葉に疑問を持つはやて。

シャーリー「分析の結果、この生命体からも使用した能力からも魔力反応は一切ありませんでした。」

はやて「そんな！…あつごめんな。続けて」
思わぬ結果に驚くが、話の続きを優先させる。

シャリー「はい。そしてなのはさんとの戦闘で放ったエネルギーですが。これは、SSSランクを超えています。スターライトブレイカーで相殺していなければ、あの程度の怪我では…」

はやて・シグナム「…なっ!?!」

SSSランクは魔導師の魔力ランクの中でも最高峰。それを超えていると聞かされ、驚きが脅威に変わる。

同時に、

シグナム「もし、他の魔法を使っていたら高町は…」

スターライトブレイカーで相殺してあのダメージ。

他の魔法や下手にシールドを張って対処していたら。

そう思うと、背筋が凍る。

はやて「とにかく、情報が必要や。ヴィータ達が戻ってきたら、もう一度会議や。」

シグナム同様、最悪の想像をしてしまったはやては、イメージを振り払うように言うのであった。

はやて side out

ノールヴエ side

〈ナカジマ家・客室〉

「止・・・カ・・・」

誰かが俺に語りかける

「そんな・・・し・・・いけない」

「ロイヤルストレートフラッシュ」
構わずコンボを発動する俺

ロイヤルストレートフラッシュが本来の力を発揮しない

「俺がさせない」

俺は、この声を知っている

お前は・・・キング？

カズマ「！？ここは？」

目覚めると見知らぬ部屋

何故か上半身裸で、包帯が巻かれている

ノーヴェ「よお、お目覚めか？」

声のした方を見るとノーヴェが椅子に座っていた

カズマ「アンタは・・・痛って！」

ノーヴェ「ノーヴェ・ナカジマだ。宜しくね。」

額に血管を浮かべた満面の笑みで、カズマの手を強く握る。

そういえば、自分から名前を聞いてほったらかしだったな。
今更気づくカズマは、自分も名乗ることにする。

カズマ「俺はカズマ。この包帯は？」

ノーヴェ「オマエ、所々傷があったからな。そんなのが目の前で倒
れられてほっとけるかよ。せいぜい感謝しろよ。」

カズマが倒れてからの経緯を話すノーヴェ。最後に、「本当はボコ
ボコにして、立ち去っても良かったんだけどな」とつけ加える。

カズマ「そうか。すまない。嫌な思いさせた上、迷惑を掛けてしまった」

ノーヴェ「ノノ調子狂うな。そう素直にされると。」
頬を軽く搔くノーヴェは、治療中に気になったことをカズマに尋ねる。

ノーヴェ「見たぞ。緑の血。身分証明も無かつたし、オマエ何者だ？」

服を着ていたカズマは、その言葉に思わず固まる。
どうしたものかと考える中

ノーヴェ「いかにも訳ありって感じだな。まあいいや。とりあえずもうすぐアタシの家族が戻ってくる。管理局の人間なんだけど安心しろよ。アタシみたいな『訳あり』でも受け入れてくれる奴らだからさ。」

カズマ「アンタも『訳あり』なのか？」
管理局という言葉に一瞬警戒するも、そのあとの『訳あり』という言葉が気になるカズマ。

ノーヴェ「…とにかく！アタシが安心しろって言ってたんだ。管理局が嫌なのは分かっけど、大丈夫だから大人しくしてる。わかったな！」

何となく居づらくなったノーヴェは部屋を出て、カズマのために軽食を準備するためキッチンに向かう。

「ナカジマ家・キッチン」

ノーヴェ「変な奴を拾うし、トレーニングは中止するはめになるし、今日は厄日か？」

ぶつくさ言いながら、カズマの軽食を準備するノーヴェ

チンク・デイエチ・ウエンディ「……ただいま（ツス）」

そこに、姉妹達が帰宅する。そこに父親のゲンヤと姉のギンガの姿はない。

ノーヴェ「お帰り。お父さんとギンガさんは」

チンク「二人は遅くなるそうだ。六課で事件があったらしく応援に行っている」

姉の返答に、局員の二人に相談をする当てが外れる。

デイエチ「誰か来てるの？」

ノーヴェ「ああ。トレーニング中に怪我人を見つけてき。訳ありそうだったから、家に連れてきて手当したんだ。お父さんたちに話を聞いてもらうつもりだったんだけどしかたない。」

とりあえず、姉妹たちを紹介しようとして軽食を持って客室に向かう。

そこには

4人「……？」

誰も居なかった

ウエンディ「わかったツス」
唐突に声を上げるウエンディ

ウエンディ「ノーヴェ。本当は怪我人じゃなくて彼氏を連れてたツスね。」

チンク・デイエチ「彼氏!?!」

ウエンディの言葉に啞然とする二人。

ノーヴェはわなわな震えている。

ウエンディ「そうツス。そと男は彼女の家に来たまでは良かったけど家族が返ってきたのを…ぐはあ。」
ウエンディを黙らせるノーヴェ

ノーヴェ「あんのバカア…」

チンク・デイエチ「ノ・ノーヴェ?」

恐る恐る尋ねる二人。しかし、

ノーヴェ「おとなしくしとけっつだたるうがあああ!?!」

怒りが爆発し、暴れまわるノーヴェ

それを止めるチンクとデイエチ

ウエンディ「男が凄いのか、ノーヴェ大胆なのか…」

完全にノーヴェの彼氏説になっているウエンディ

ノーヴェの災難な一日はこうして終わっていく。

ノーヴェ side out

カズマ side

ミッドチルダ・都外

カズマはノーヴェが部屋を出た後、EXジョーカーに変身し？10
「THIEF」の力で姿と気配を消し、ナカジマ家を離れていた。

カズマ「彼女の『訳あり』って…」
ノーヴェの自分も『訳あり』という言葉が、ほんの少しだけ気にな
っていた。

本来、すぐにでもEXジョーカーの力で管理局に復讐するつもりだったカズマ。

しかし、

高町なのはという思わぬ強敵との遭遇。

ノーヴェ・ナカジマという何となく気になってしまった女性。

かつての戦いで協力者「キング」の幻。

イレギュラーの連続でカズマの復讐劇のスタートは失敗に終わる。

カズマ「まずは情報収集といくか。」

カズマは焦ってなかった。

生物学の発展した世界で育った彼はわかっていた。

- 自然界で勝ち残れるのは強い奴だけではない -
- 自分の未熟さを認め、失敗から学び変わるもの -

自分の知らない「魔法」を学ぶ

自分の知らない「ミッドチルダ」について学ぶ

今は学ぶことが重要だと。

カズマは一人、暗闇に消えていくのであった。

切札5：ノーヴェの災難（後書き）

この作品に、仮面ライダーが登場する予定はありません。過去編や回想シーンには出てきませんが。

カズマはEXジョーカーとして戦っていきます。

なのはと仮面ライダーのコラボ作品の多い中、少しでも差別化を図るための苦肉の策です。

小細工なしで、他の作家さんと戦える力が欲しい。

切札6：摘発（前書き）

カズマが図書館で急速に知識を付けていく場面。

思いつきりMOVIE対戦COREのノブナガを真似してます。

私もあんな頭が欲しい。

切札6：摘発

（ミッドチルダ・図書館）

カズマ side

カズマは現在、ミッドチルダでも都内有数の大型図書館にいる。

ナカジマ家を後にしたカズマは、都内の駅に向かい交番を探していた。

地理を全く知らない世界だが「駅の近くに交番もある」とう、自分の世界の常識の元に行動し、実際に交番が見つかった。そこで、都内で一番大きい図書館の場所を聞きいたのである。

従業員1「また、あいつ来てるよ。今日は何調べてんの？」

従業員2「転送技術に関する本みたい。かなり専門的なヤツ。」

カズマがいる図書館は幅広い分野の書籍を有し、レベルも入門編から専門家が扱うレベルまで幅広い。

彼がここに通うようになって今日で5日目。今は、転送技術に関して勉強中である。専門家が読むようなハイレベルな本を読んでおり、10冊以上の本が周りに積まれている。

初日こそ従業員は、本を独占しないよう注意をしていた。しかし、カズマの本を読むスピードが尋常でなく積み上げた本もすぐに元に戻す。その際、再び大量の本を抱えてくるが、やはりすぐに読んで戻すので他のお客からクレームが来ることはなかった。

カズマはこれまで、魔法、ミッドチルダ、時空管理について学びつくし、転送技術に関しても今終わった。そして、本を元に戻し新しい分野のコーナーに移動する。

従業員1「今度は何だ？」

カズマは常に入門編から入り短時間で専門レベルに達し、新しい分野に行く。

次は何について学び何時間でクリアするのか。

従業員の間では、カズマの観察が流行っていた。

カズマ「目印は…この建物か…」

従業員の予想を裏切り、カズマはただの地図を広げ何かを確認していた。

そして、一人納得すると元に戻し図書館を後にする。

その後、カズマを図書館で見たものはいない。

カズマ side out

（機動六課・会議室）

六課 side

はやて「ほんなら会議をはじめで。手元の資料を見てな。部隊長の言葉で全員が資料に目を向ける。」

会議に参加しているのは

はやて、フェイト、シグナム、ヴィータ

ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディの9名である。

解散間近の機動六課だが仕事は常にやってくる。

EXジョーカーの襲撃により、なのはが全治一か月、ティア達も最低3週間の入院となり六課は大幅な戦力ダウンを強いられていた。万年人手不足、ましてや解散寸前の部署にティア達に匹敵する戦力を貸してくれる所などない。

そんな戦力不足に悩んでいたはやてを救ったのが、ギンガ達だ。

ギンガは六課と交友関係にある108部隊に属しており、真っ先に援軍を名乗り出た。

また、ナカジマ家に引き取られたノーヴェ達も

「更生の機会をくれた人達に恩返しをしたい」と協力を申し出のだ。

ノーヴェ達に関しては、異論の声が各方面からあったがすぐに消えた。

「文句が有るなら私とOHANASIする？」

どす黒い笑顔をした包帯だらけの魔王の動画が、異論を唱えた部署に贈られたとか。

はやて「今回摘発する研究所は、ロストロギアをつかった違法な生体実験を行うとる。このロストロギアは最近見つかったもので正式名は無いんやけど、細胞の強化や全く別のモノに進化させる力があるらしいんや。」

フエイト「…生体実験…」

その言葉に不快感を抱くフエイト。ギンガやナンバーズも同じようだ。出生が特殊な彼女らは、こういうことに人一倍敏感である。

ヴィータ「なあ。この前なのは達を襲った奴って、この研究所が送り込んできたんじゃねえのか？」

一通り資料に目を通し、EXジョーカーと研究所の関係を疑うヴィータ。

シグナム「摘発を目前にしての事だからな。可能性はあるが、何故あれ以来何もかけてこない？」

はやて「なのはちゃんとの戦闘で相手も重傷を負ったとか？」

ギンガ「だったらすぐにも場所を変えるのでは？資料によると、襲撃から5日たっても移動した形跡はないようですよ。」

違法実験をする研究所

摘発を目前にした六課への襲撃

魔力を持たない謎の生命体

細胞を別のモノへ進化させるロストロギア

これだけなら、研究所が実験で作り出した生命体を使い六課を襲撃したと考えられる。

しかし決め手になる根拠もなく、何故研究所を変えないのかという疑問がでてくる。

「はやて「なんにしても動いてへんなら研究所を摘発するチャンスや。あの生命体が重傷で動けんなら尚更な。今夜、一斉摘発に向かうで。」

相手が動かない今がチャンス。その考えに全員が賛同し摘発する段取りが進む。

六課 side out

〈違法研究所・出入口付近〉

はやてside

日が落ちかけ、夜に差し掛かろうとしている。

ノーヴェ「裏出入口、現在以上無し」

デイエチ「こちらと同じく以上ありません」

はやて「了解や。完全に日が落ちたら、うちらが正面から突入する。裏はまかせたで。」

通信で現状を確認する。

研究所は、都市から離れた廃墟や無人の工場が並び立つ場所にある。道路沿にトラックも出入りする正面出入口があり、はやてを初めとする六課の主要メンバーが付近で待機中。

他に裏口が2か所あり、ギンガ・ノーヴェ組、チンク・デイエチ・ウエンデイ組の二手に分かれている。

主要メンバーが正面から突入し一気に摘発。裏口から逃げる者は応援組が対処する手筈だ。

しかし、

ズゴオオオオオオオオオン！！

日が落ちるのを待っていたその時、突如研究所が爆発する。

はやて「なんや！？チンク、ウエンデイ、デイエチ無事か？」

突然の爆発に驚きながら近くに待機をしていた3人の安否を確認する。

チンク「我々は無事だ。しかし一体……！研究員が何名か出てきたぞ！」

はやて「チンクはそいつらを捕まえて事情を聞くんや。ウエンデイとデイエチは救助隊が来るまで、ライディングボートとイノメースカノンで消火活動！」

チンク・デイエチ「了解」

ウエンデイ「任せるっス」

指示を受け、それぞれ逮捕と消火活動に向かう。

はやて「キング・ノーヴェ聞こえるか？」

キング「はやてさん。これはいったい？」

はやて「詳しいことはわからん。今、ウエンデイ達が消火活動をおこなつとる。2人はウイングロードとエアライナーで上空から搜索。逃亡者を見つけてほしい速……」

ヴィータ「はやて！」

二人は近くに向かう

研究員「た、助けてくれええええ！」

天井が吹き飛んだことで、悲鳴が外まで聞こえる。

それを聞いて急ぐ二人

そこにいたのは

ノーヴェ「あいつは！」

研究員を左手で持ち上げるEXジョーカー

右手には大きな袋に何やら大量に詰め込んで持っている

ギンガ「例の生命体！」

研究員の元に降り立つ二人

EXジョーカー「!？」

ギンガ「え〜っと。言葉が通じるか分からないけど…管理局の者です。その人を直ちに話してください。」

通じるとは思えないが、とりあえず言ってみる。

EXジョーカー「ふん!!」

研究員を思い切り投げ飛ばすEXジョーカー

研究員は壁に激突し気絶する

そして、ラウザーをバックルから取り外しEXラウザーを起動させ構える。

ノーヴェ「てめえ!!」

EXジョーカーの行為を挑発と受け取り怒るノーヴェ

ギンガ「落ち着いてノーヴェ。こいつは…」

ノーヴェ「分かってるよ!能力全てがAランクを超えてること…そして…バカ姉貴を病院送りにしたことなあ!!」

ノーヴェはEXジョーカーの話聞いたとき恐怖を覚えた。

しかし、それ以上にスバルを傷付けた事が許せなかった。

普段はバカみたいにニコニコして、やたらベタベタくっついてきて正直うっとうしと思うこともある。それでも、新しい姉のことが好きだ。戦闘機人だろうと関係ないと言わんばかりの明るさを持つ姉を尊敬している。

家族を傷付けられた怒りが恐怖を凌駕していた。

ギンガ「ノーヴェ…それだけ分かっていたら大丈夫ね。」

ノーヴェの怒りはスバルがEXジョーカーにやられたことを聞いたときから感じていた。ここでEXジョーカーと遭遇したときは、怒り任せに突っ込むのではないかと心配した。しかし、怒りの中にも冷静に間合いを取って、攻撃に備えているのを見て安心した。

そして今度は自分も構えを取る。そして、闘志を向ける。

大切な妹を傷付けた未知の異形に。

夜の暗闇を炎が赤く照らす

燃え盛る炎の中

二人の機人と

『一匹』のアンデッドが睨みあっていた

切札6：摘発（後書き）

戦闘シーンまで持っていけなかったorz

次回にお預けです。

恋愛フラグではありませんが、カズマとノーヴェの繋がりも次回から強めていきます。

切札7：一人の機人、一匹の切札（前書き）

聖徳太子様

感想及び、誤字脱字のご指摘。有難うございます。

ご期待に答えられるよう頑張っていきます。

切札7：一人の機人、一匹の切札

（違法研究所の一室）

ノーヴェ side

燃え盛る炎の中

EXラウザーを構えるEXジョーカー

対するは、デバイスを起動させたギンガとノーヴェ

睨み合いが続く中、先に動いたのは

ギンガ「はああああ！」

ノーヴェ「うりゃあ！」

ギンガとノーヴェ

それぞれブリッツキヤリバーとジェットエッジを加速させ

その勢いを利用し、魔力を込めた拳を放つ

ズガン！！

EXジョーカー「ふん！」

若干勢いに押されるが、EXラウザーで攻撃を受け止め
二人の拳を上払い、切りつける。

ギンガ「っく」

ノーヴェ「っつ」

二人はシールドを発生させると同時に後ろに跳び威力を軽減する。
ノーヴェは反応が一瞬遅れ、左腕を切られるがダメージはゼロに近い。

「TACKLE」

EXジョーカー「グラアアア！」

二人が距離を取るとすかさず？4を発動
青いオーラを纏って突進していく

ノーヴェ「んなもんだたるかあ」

エアライナーを展開しノーヴェは上空に回避

ギンガもブリッツキヤリバーを加速させ回避する

？4は突進力を強化する能力

EXジョーカーはその勢いを止めようと一瞬動きが止まる

ノーヴェ「どりやあああああ！！」

一瞬の隙をつき、蹴りのラッシュを浴びせる

そして

ノーヴェ「でりやあああ！！」

怒涛のラッシュの後、魔力を集約した特大の蹴りをくらわせる

吹き飛ばされるEXジョーカー

しかし攻撃は終わらない

ギンガ「リボルバアアシユウウト！！！」

ノーヴェの攻撃中に魔力を蓄えていたギンガは

吹き飛んできたEXジョーカーに攻撃魔法を叩き込む

EXジョーカーはその勢いのまま壁に激突する

ノーヴェ「っしゃあ」

連携攻撃が決まり喜ぶノーヴェ

ギンガの元に行こうとした

その時

「BIO」

?7が発動

ノーヴェ「何!?!」

気の緩んだノーヴェを触手が絡め取る

ギンガ「なっ! 攻撃が効いていない?」

あれだけ攻撃を受けてもダメージを負った様子は無く
平然としているEXジョーカーに驚く

EXジョーカー「ふんっ」

ノーヴェ「うわあ」

ギンガ「ノーヴェ! つく!」

触手で縛ったノーヴェを自分の元に引き寄せせるEXジョーカー
ギンガはノーヴェの体を掴もうとするが間に合わず
EXジョーカーの元に引き寄せられる

フェイト「オーラだけでも凄い威圧感。」

話には聞いていても、対面して改めてその危険性を感じ取れる
それだけ凶悪なオーラを発していた

ヴィータ「一気にケリつけないと不利だな…皆！」

長期戦は不利と判断し、一気に倒す作戦を伝えるヴィータ
EXジョーカーに人語を理解する知能の有無はヴィータ達には判断
できないが、念のため念話で伝えている

フェイト「今の戦力だと、それが現実的だね。」

ヴィータ「奴はなのはのSLB以上の能力も持っている。十分注意
しろ。いいな！！」

ギンガ・ノーヴェ「了解！！」

各自四方に分かれ、フェイトは空中から得意の高速戦で攪乱
ギンガとノーヴェはウィングロードとエアライナーで立体的に移動し
牽制弾や誘導弾でEXジョーカーの動きを制限
ヴィータは空中から様子を伺っている

「RABID」

EXジョーカー「ガアアアアアアア！！」

?4の能力でEXラウザーからマシンガンのようにエネルギー弾を
連射

しかし、空中を立体的に動くフェイト達には当たらず
?4の効果が切れてしまう

ヴィータ「はあはあ…どうだ？」

フェイト「非殺傷だけど…生きてる…よね？」

鉄槌の騎士の超重量攻撃をノーガードで諸に受けては
普通なら非殺傷でも物理ダメージはかなり大きい

だが

EXジョーカー「はああああ」

超重量攻撃をもともせず、EXジョーカーはノーヴェ達を見据えていた

フェイト「そんな！」

ギンガ「諸に受けたのに…」

ノーヴェ「ありえねえ」

ヴィータ「何なんだよ…コイツ…」

どんなに強力な攻撃を与えても、いつこうにダメージを受けない
目の前の異形に恐怖を通り越して呆然とする四人

EXジョーカー「ふん」

四人「……カード?」「……」

「?6・?6・?6・?6・?K フォーカード」

四人を尻目にラウズカードをEXラウザーに読み込ませ

フォーカードを発動

雷、炎、風、氷属性のエネルギーがEXラウザーに集まる

ヴィータ「風と氷まで使え……!!」

四つの属性を纏ったEXラウザーで

超重量攻撃で消耗したヴィータに切りかかる

フェイト「ヴィータ……!」

高速でヴィータの前に立ち

バリアを展開するフェイト

ギンガ、ノーヴェも共にバリアを展開

フェイト、ギンガ、ノーヴェはカードリッジを消費し続けバリアを
強化

ヴィータも残った魔力で防御にまわるが

EXジョーカー「グルラアアアアアアア……!!」

ズガアアアアアアア……!!!!

四人「……うっ……ぐ……」

EXジョーカーの攻撃によるダメージと
魔力をフルに使った疲労で動けない四人

EXジョーカー「はあ……はあ……ふう……」
若干息が乱れるがすぐに整える

そして

ノーヴェ「ぐっ……このお……」

ノーヴェの首を右手で掴み上げ
EXライザーを突きつける

ヴィータ「よせ……！」
フェイト・ギンガ「止めて……！」

ヴィータ達の叫びもむなしく
ノーヴェに止めを刺そうとするEXジョーカー

しかし

一つの傷口がEXジョーカーの攻撃を止める

EXジョーカー（！？……これは！）

先程の戦いでEXライザーで切りつけたノーヴェの左腕
その傷口からは機械が顔を覗かせていた

* * * * *

アタシみたいな『訳あり』でも

* * * * *

ノーヴェと初めて会ったとき、彼女が言っていた言葉が
EXジョーカーの、カズマの頭の中によぎる

ノーヴェと対峙したとき、僅かでも知った顔であろうと
管理局の魔導師として立ちはだかるのであれば、彼女を殺すつもり
だった

『訳あり』

目の前の機械の体

それらがEXジョーカーの精神を乱し
気付けばEXラウザーを引っ込め、ノーヴェをはなしていた
EXジョーカーからは戦闘の意志が消え
フェイト達から離れて、何かを大量に詰めた袋を手にする

ノーヴェ「はあはあ…てめえ…いつたい」
止めを刺すのを止めたEXジョーカーに
息を乱しながら突っかかる

バキバキ!!!

ギンガ「ノーヴェー!!!」

そんなノーヴェエに頭上の瓦礫が崩れ落ちてくる
自分達もノーヴェエも動けない
全員が呆然とする中

「THUNDER」

4人「「「「えっ!?!?!?!」」」」

?6の雷で瓦礫を全て砕く
雷が飛んできた方を見ると、EXジョーカーがノーヴェエの頭上に剣
を向けていた

ギンガ「ノーヴェエを…助けたの?」

「THIEF」

フェイト「消えた!バルディッシュ!」

4人の思考が止まったとき
EXジョーカーは?10を発動し姿を消した
フェイトがバルディッシュに辺りを検索させるが
敵はこの場から離脱したようだ

現在

フェイト達は、到着したシャマルや医療班の治療を受けている治療を受けながらはやてに状況報告

そんな中ノーヴェは

ノーヴェ（あの野郎アタシに止めを刺さず、あげく見逃すように消えやがって。）

姉の仇を取るどころか、仇に助けられ見逃してもらった形になってしまった

自分に対する怒りと同時に

EXジョーカーへの新しい敵意が生まれる

ノーヴェ side out

違法研究所の摘発から4日後

くミッドチルダ・都内く

ノーヴェ side

ノーヴェ「／／ううう…バカ姉責めえ…／／」

ふらふらと歩くノーヴェ
何故か髪と服が乱れ顔も赤い
服は第一ボタンが外れ、谷間が見えている状態だ

ドン！

ふらふら歩いていたので通行人とぶつかり
尻餅をついてしまう

???「すみません。大丈夫ですか？」

ノーヴェ「悪りい。こっちの不注意だ。」

差し伸べられた手を握り立ち上がるノーヴェ
しかし、その相手は…

ノーヴェ「オマエ！」

カズマ「アンタは！」

人々が行き交う街で

一人と『一匹』は再び出会う

切札7：一人の機人、一匹の切札（後書き）

今回は、少し時間軸を戻し

街でカズマとノーヴェが出会うまでの出来事から始まります。

切札8：『訳あり』（前書き）

DEADPOOL ZERO AQUA様

酸欠帝SV様

感想を頂き、本当に有難うございます。

皆様の声を励みに

今後も精進していきますので、よろしくお願いします。

切札8：『訳あり』

くミッドチルダ・無人ビルく

カズマ s i d e

違法研究所での戦闘から四日後

カズマは現在

無人ビルで何かを組み立てている

都市部から離れた無人ビルや廃工場の並び建つ場所

カズマが図書館で最後に調べたのは、こういった廃墟となった場所である

人が近づかず、必要な機材はそこらの工場から探せるからだ
第一候補は運悪く違法研究所があり、結果ノーヴェ達と遭遇したの
で諦めた

その時、研究所から持ち出したのは金品と最新の機材、見えそうな
道具である

カズマ「ようやく完成か。」

盗んだ機材と道具で、四日かけて造った青いパソコン

一見ただのノートパソコンだが、驚異的な情報処理速度と演算能力
を持っている

ここに来て得たミッドチルダの科学力、『13人の魔導師』が使っていた特別性ストレージデバイス、そしてカズマの天才的頭脳によって造りだされたパソコンは、管理局のコンピューターとも戦えるスペックを持っている

性能テストもかねて、管理局のデータベースにハッキングをしかける引き出すデータは『戦闘機人』
図書館で管理局や過去の事件について調べた時目にした項目
ノーヴェの腕を見たとき非常に気になり、管理局から詳しい情報を盗み出す

極短時間で映し出されたデータは

カズマ「やはり、まともな組織ではないな」

機械をインプラントして肉体を強制強化
不可能とされた技術を可能にしたジェル・スカリエッティ
裏で糸を引いていた管理局の闇

カズマ「何故、医療に応用しようという考えを持たないんだ？」

この技術は明らかに医療で大きく活躍する
超高性能な義手義足を初め、難病に苦しむ人を助けることができる
しかし、JS事件から歪んだ正義だけが広まり
戦闘機人「悪と決めつけ一方的に遠ざける

人を救える素晴らしい技術なのに

カズマ「まあ、人の事は言えないか」

管理局の歪んだ正義に腹立たしさを覚える一方で、自分も同じだと思っ

アンデッドの力は研究を進め、生物学・医学に役立てるはずだった
しかし今は、その力を復讐のために使っている
自ら異形となった自分も十分歪んでいる

カズマはパソコンを閉じ、新たな力を手にするため街へ出る

カズマ s i d e o u t

〈都内・大学病院〉

ノーヴェ s i d e

ノーヴェ「やあめえろおお！バカ姉貴い！！」

院内にノーヴェの声が響き渡る

ただ今、スバルのセクハラを受けている真っ最中だ

スバル、ティア、キャロの三人が入院している部屋

入院中のスバル達にお見舞いもかねて、違法研究所の摘発についての報告にきたノーヴェとギンガ
ウエンディは更生プログラムの補習、チンクとウエンディはその見張りである

報告の際、スバルがE×ジョーカーに傷付けられたことに、ノーヴェが怒っていたことをギンガが伝えると

スバルが感極まってノーヴェに抱き着いた

最初は頬ずり程度だったのだが、今はノーヴェの胸を揉みまくっている

ノーヴェ「／／／ちよっ…ホント…止め…ふぁ…」

しだいに喘ぎ声が目立ち始め

スバル「かぶり」

ノーヴェ「／／／んんっ…あぁん…」

スバル「ふううう」

ノーヴェ「／／／ふぁぁぁぁん！…ふにゅ」

服に手を突っ込まれ胸を揉まれ

耳への甘噛みから甘い吐息を吹きかけるコンボで

ノックアウトされたノーヴェ

スバル「ふい、ごちそうさま。」

妹をたつぷり味わったスバルは、入院患者とは思えないほど血色の良い顔だった

その一部始終をギンガは「あららうふふ」とニコヤに見ていた
ティアは性教育に悪いとキャロの目と耳を塞ぎ

自身は真っ赤になりながらも最後までしっかり観戦

今は満足げな表情をしている

〈ミッドチルダ・都内〉

病院を出てた後、ギンガはチンク達の迎えに
ノーヴェは一人家路につくために歩いている

スバルのお楽しみタイムの後なので、ふらつく足取り

ここでぶつかったのがカズマである

最初は気づかなかったが、黒いTシャツとジーンズ、フード付の青
いジャケットの青年

怪我の治療をして、いつの間にか自分の家から姿を消したカズマだ
った

カズマ「アンタ、その恰好はどうした？」

ぶつかった相手がノーヴェだと気付いたカズマは、尻餅をついてい
るノーヴェを立たせ

凄い恰好になっているノーヴェに問いかける

ノーヴェ「あ？……：／／／！！」

カズマの問いに、自分が街を歩くにはとんでもない恰好になってい
ることに気が付き、急いで乱れた髪と服をなおす。

ノーヴェ「／／／こっこれは……違っ……その……」

変な誤解をされないよう、必死に弁解しようとするが言葉がうまく

出てこない

ほぼ赤の他人であるカズマに弁解する必要もないのだが
何故か、カズマに変な想像をされるのが嫌だった

カズマ「よく分かんないけど、アンタ時間あるか？せっかく会った
んだ。この前のお礼とお詫びがしたいんだけど。」

ノーヴェ「ノノノしてたんじゃなくて、されたのであって……って
…時間？これから帰るだけだし、時間なら有るけど？」

自分の弁解を受け流し

いきなり予定について問いかけてくるカズマに戸惑うが
特に予定も無いのでそう答える

カズマ「そっか。それじゃあ……あの店にしよう。」

ノーヴェ「えっ？おっおい！」

戸惑うノーヴェの手を取り、目に入ったファミレスに入っていく

ファミレス

店員「いらっしやいませ。」希望の席は「ございますか？」

カズマ「空いてるなら、一番奥の席で。」

店員「かしこまりました。」

奥の席に通される二人

ノーヴェ「なんで、こんな奥の席なんだ？」

カズマ「ここなら、聞かれることもないだろ。ほら、好きなのたのみな。」

ノーヴェ「成程。…食いもんで誤魔化せると思うなよ。」

緑の血について、姿を消した理由について問いただすつもりだったノーヴェ

ここなら、多少声を大きくしても周囲に聞かれないと納得する食べ物で誤魔化されるつもりはないが、とりあえず注文を決める

しばらくすると、ノーヴェにはサンドイッチとオレンジジュースカズマにはピラフとアイスコーヒーがとどく

現在午後二時半

注文を終え、店員も来ることもないので遅めの昼食を取りながら本題に入る二人

ノーヴェ「で？何で姿消したんだ？アタシは大人しく待ってけって言ったよな？」

料理を口に運びながら、最初の疑問を問いかける

カズマ「……家族が返ってきたし。女の子の家いきなり男がいたら騒ぎになるだろ。お互い面倒なことになるから出てっただけだ。」

本当は全然違うのだが、こう言えばこれ以上突っ込こんでこないと思ひ答える

ノーヴェ「ぶはっあ！ばっバカかてめえ…げほげほ…何言ってるんだ！」

* * * * *

「彼氏を連れてきたっスね」

* * * * *

まさか、ウエンディと似たパターンの答えが返ってくるとは思わず、口の中のモノを詰まらせ咳き込むノーヴェ。急いでジュースで流し込む。

ノーヴェ「はあはあ…じゃあ次。…お前の…体について。」

姿を消したことについては、もう突っ込まないこととして次の疑問を気まずそうに尋ねる

思い通り深く突っ込まれなかったのは良かったが

新しい疑問の答えに困るカズマ

さっきのような都合の良い嘘も思いつかないので結局

カズマ「管理局といろいろあってね。こういう体になった。…
真実を答えた。ただし、過程を大きく省いて。」

ノーヴェ「そっか。やっぱり管理局か。…アタシの…」

カズマ「いいよ。」

ノーヴェ「え？」

自分の『訳あり』を話そうとするがカズマが遮る

カズマ「アンタの『訳あり』は聞かない。今は家族と楽しんでるんだろ？わざわざ嫌なことを話す必要はない。」

半分本気で半分嘘

半分は、既に詳細を知っているから聞かなかつただけの事

半分は彼女も被害者。今は管理局に近いとはいえ苦しめる相手ではないと思ったから

ノーヴェ「何だよ……これ以上詳しく聞きけねえじゃん。」

アンフェアを嫌うノーヴェ

本心は詳しく知りたいと思っているが

自分の秘密は伏せ、相手の秘密を一方的に知るの嫌だった
断る相手に無理やり秘密を押し付けることも

その後は料理を食べ、会計を済ませて店を出る
当然カズマのおごり

時刻は夕方に差し掛かろうとしている

カズマ「じゃあな。」

ノーヴェ「おう。」

店を出て二人はわかるる

くミッドチルダ・住宅地く

ノーヴェ「……そういえばアイツ、どこで寝泊りしてんだ？」

あまりにも自然にあっさりとわかれたが
家路につく途中で、カズマに対する新しい疑問が生まれた

ノーヴェ side out

くミッドチルダ・都外く

カズマ side

カズマ「あっ！！機材買うの忘れた。」

アジトに戻る途中で本来の自分の目的を思い出す
EXラウザーの転送機能を強化するためには、廃墟にあるパーツで
は足りず

機材を買うつもりで街に出たのだが
ノーヴェと食事をしていたら、完全に忘れてしまっていた

カズマ「何をやっているんだ…俺は」

アンデッドの能力を今だに使いこなせず
少し境遇が可愛そうだからと相手に同情し
あげく、目的を忘れて行動してしまう

「オマエでは悪を演じるのが限界だ」

自身の情けなさに苛立っているとまた声が聞こえた
かつての戦友の声か

カズマ「ウルサイ！仲間のためにも、自分のためにも。今は不完全
でも、すぐに『心』を捨ててやる。」

戦友の声を振り払うように

自分に言い聞かせるように

そう叫んだカズマは

誰も居ない世界に戻っていく

切札 8 : 『訳あり』 (後書き)

次回はカズマとノーヴェをさらに近づけるつもりです。

切札9：純一と元OLとアルバイト店員の男（前書き）

霊宮空刀様、聖徳太子様

感想を頂きまして、ありがとうございます。

自分の中で誤字脱字をどうにかせねばと考えており

10話を投稿したら（切がいいので）

一度、総チェックをかけます

今回のタイトルがこのようになっておりますが

内容的には「ナカジマ家編 前編」となっております

切札9：純一と元OLとアルバイト店員の男

未確認生命体についての報告書

新暦XX年X月X日

機動六課・屋外訓練場に突如出現。自主練習中だったフォアードメンバー四人を一瞬で戦闘不能に追い込む。外見はカミキリ虫に酷似しており、黒い全身に所々に青いライン。刺刺しい右半身が特徴である。

驚異的な戦闘力を持ち、高町なのは一等空尉の「スターライトブレイカー」をも凌ぐエネルギーを持っていることが確認されている。機動六課襲撃後、五日間姿をくらませていたが、違法研究所の摘発の際に再び遭遇。ヴィータ三等空尉、フェイト・T・ハラオウン執務管、ギンガ・ナカジマ捜査官、ノーヴェ・ナカジマ（協力者）の四名と戦闘になるが、捕獲どころかダメージを与えることさえできなかった。四名を圧倒した後、再び逃走。四日以上その姿を見せていない。

未確認生命体からは魔力反応が一切なく、雷、炎、風、氷の四つの属性を操り、異常な戦闘力から犯罪組織が造りだしたのではないかと推測される。我々は危険性が高いと判断し、今後遭遇した場合は、『殺傷設定』による討伐を最優先する方向性で捜査を続ける。

機動六課総部隊長・八神はやて

〈機動六課・会議室〉

六課 side

はやてが、これまでの情報をまとめた未確認生命体（EXジョーカー）についての報告書を使い、会議が行われている。参加メンバーは

はやて、フェイト、ヴィータ、シグナム、シャマルの六課組
ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディの増援組
計10名

ギンガ「あの研究所と未確認生命体は関係無かったってことですか？」

はやて「せやねん。逮捕した研究員二十数名を取り調べたんやけど、全員が否認しとる。押収した資料やデータからも、未確認に関するモノは一切なかったし。間違いないわ。」

EXジョーカーに関する情報が少なく
摘発した研究所からも、期待したデータが得られず
会議は難航していた

フェイト「しばらくは、摘発候補の研究所からあたっていくしかないさそうだね。」

シャマル「もう少しで専用サージャーも完成するそうです。それまで頑張りましょう。」

シャーリーは既に、これまでのデバイスの記録からEXジョーカーの生体パターンを収集し、専用サージャーの作成に取りかかっている

た。しかし、完成にはまだ時間がかかる。

それまでは、六課主要組が未確認（EXジョーカー）と関係があり
そんな研究所をピックアップ。摘発時に増援組の力を借りるとい
事で会議は終了した。

増援組はここで解散だが、主要組は怪しい研究所をピックアップす
るため会議室に残る。

ギンガは108部隊に用があるため、会議終了後、ノーヴェ達とわ
かれた。

六課 side out

くミッドチルダ・都内く

カズマ side

元OL「助けてくださあああい！」

カズマ「えっ？おっ？？」

この前買い忘れた機材を購入し、アジトに戻ろうとしていたカズマに
OLらしき女性が助けを求めて走ってくる

どうでもいいが、このOL
上司を蹴り飛ばしクビになったばかりだ

元OL「向こうで女性達が、ガラの悪い管理局員に絡まれてるんです。」

カズマ「いや…なんで俺なの？近くに他に男がいたでしょ？」
至極当然の疑問を元OLに投げかけると
かえってきた返答は

元OL「あなた、私の彼に似たようなモノを感じるの。ほら早く、
男でしょ。」
無茶苦茶な理由だった。呆気に取られているカズマを強引に現場に
連れて行く

現場につくと確かに二人の局員の制服を着た男が
四人の女性に絡んでいた
周りの人間は気にはするものの
管理局の制服を見て足早に立ち去る

カズマも今は面倒事を避けたいので
その場を去ろうとするが
一人の知った顔を見て気が変わる

カズマ side out

ノーヴェ side

ギンガとわかれ、家に向かっていた途中
ノーヴェ達に二人の男性局員が声をかけてきた
始めは軽い感じのナンパだったのだから
そのしつこさは増して

局員1「少しだけでいいからさ。」

局員2「俺達は他の奴らとは違うよ。ちゃんと人として見てるから。」

J5事件以降、ノーヴェ達は正式な更生プログラムを受け
ナカジマ家の元で懸命に生きている

しかし、彼女らを避ける者は多い
いや、避ける者はまだいい
厄介なのは、彼らのような存在だ
容姿の整ったノーヴェ達を狙って付きまとつ者もいる

「人として見ている」と言っているが、要は体目当てだ

ノーヴェ (こいつら...)

デイエチ（ノーヴェ、ダメ！）

キレかかっているノーヴェを抑えるデイエチ

自分達が面倒を起こせば、ゲンヤ達に迷惑がかかる

正当防衛でも、こういった輩は肩書を使って自分達の証言を潰す

それが容易に分かるからノーヴェ達は強い抵抗を我慢している

相手も、それを理解しているので強気にノーヴェ達に絡む

局員2「ほらあ、遊びに行こうよ。」

ウエンディ「ノノノ!?」

男の一人がウエンディのお尻をいやらしい手つきで撫でまわす

デイエチ「ウエンディ!」

ノーヴェ・チンク「てめえ!!（貴様!!）」

我慢の限界を超えたノーヴェとチンク

反撃しようとした

その時

局員1「ごぶっ」

局員2「がはっ」

ノーヴェ達が反撃するよりも先に

二人の局員は、一人の青年に殴り飛ばされる

その青年は

ノーヴェ「カズマ」

絡まれているのがノーヴェだと知り
助けに入ったカズマだった

局員1「いつてえ！何だオマエ！」

局員2「管理局員を殴るとは、勇敢じゃん。」

一人は怒りをあらわに、もう一人は嫌味を交えてカズマに言葉を浴
びせる

そのままカズマに殴りかかるが

局員「ぐはっ！！！」

局員の攻撃を腕を使ってさばき、カウンターキックを何度も叩き込む
肉弾戦では勝てないと悟った局員はデバイスを起動させようとする

ナンバーズ「危ない（っス）」

デバイスを使われてはさすがに危ない

四人はカズマの加勢に入ろうとするが

局員「なにっ！！！」

起動させる前に、局員から待機状態のデバイスを奪い取り

ポイ！

通りかかったトラックの荷台に投げ込む

デバイスを乗せたままトラックは走り去る

カズマ「デバイス無くしたら、始末書じゃ済まないんじゃないの？」

いかなる理由が有ろうと、デバイスをなくした局員には重い罰が与

えられる

場合によっては懲戒免職もある

局員1「この野郎……」

局員2「おい、急いで追うぞ。」

遠ざかるトラックを追って走り去る局員

そんな二人を、カズマはただ見ていた

元OL「やっぱり、純一（彼氏）にそっくり！」

カズマを強引に連れて来た元OLは
そう言っただけに行ってしまった

がば！

カズマ「????」

ウエンディ「アンタ凄いつス！カッコいいつス！アリガトウッス！」

カズマに抱き着いてお礼と絶賛をするウエンディ

ディエチ「こら！抱き着いちゃダメでしょ。すみません、助かりました。」

ウエンディを引き剥し、お礼を言う

チンク「礼を言うぞ。」

ノーヴェ「ノノありがと」

チンクとノーヴェも続く。ノーヴェは少し照れくさそうに

カズマ「別にいいさ。じゃあ俺はこれで……」
ノーヴェ「待て。助けてもらったんだ、お礼させる。」
帰ろうとするカズマの手を取って引き留める

ウエンディ「そうっす！お礼がしたいっす！」
空いているカズマの手を握るウエンディ

チンク「誰かが言っていた。小さな恩を受けたら大きな恩で返せと。」

「
ディエチ「全然小さな恩じゃないけど……でも、迷惑でなければ是非。」

チンクもディエチも迫る

こうしてナンバーズはお礼としてカズマを近くのファミレスに連れて行った

ファミレス

アルバイト店員「いらっしやいませえ。五名様ご案内です。」

五人が入ったのは、この前カズマとノーヴェが食事をした店
昼時とあって、この前より混雑している

そんな中、偶然にも以前と同じ奥の席に通された

それにしても、やる気の無い店員である

席に通され

壁側の席にノーヴェ、カズマ、ウエンディの順で
通路側の席にチンク、デイエチの順で座っている

ウエンディはカズマが余程気に入ったのか
かなり密着している

ノーヴェはカズマと微妙な距離をとっている

食事を取りながら、お互いに自己紹介をしていた

ノーヴェとカズマは少しだが面識があること

以前同様、ほんの少しだけ

『訳あり』についても

一通り話した後、先程気になったことを

カズマはノーヴェ達に尋ねる

カズマ「アンタ達、なんで反撃しなかったんだ。俺の印象だとアイ
ツ等よりアンタ達の方が強い。それに、どう見てもアイツ等の方が
悪いのに。」

デイエチ「私たちが面倒を起こすと、お父さん達や面倒をみてくれ
る人達に迷惑がかかるから。」

チンク「我々は、まだ完全に信用されていないからな。まあ当然だ

が。
」

ノーヴェ「アイツ等、それをいいことに……」

ノーヴェの拳が強く握られる

カズマ（そんなことだろうと思ったよ。）

管理局の現状を知っているカズマは

絡まれているのがノーヴェだと知ってすぐに理解した
立場上、反撃できないことを

気付けば助けに入っていた

ウエンディ「だから凄く助かったっす。改めて、アリガトウっす！」

デイエチ「ありがとうございます。」

チンク「ありがとう。」

ノーヴェ「／＼あ・あ・あ・ありがとう。」

ありがとうーブレイドー！

カズマ「……っ……」

がたん

デイエチ「どうしたの？大丈夫？」

カズマ「ああ…大丈夫だ…」

ノーヴェ達のお礼を聞いた途端
頭を左手で抑えよろめく

カズマ（何で…今さら）

ありがとう

かつてブレイドとして戦っていたとき

何度も聞いた言葉

その言葉に幾度となく勇気をもらった

その言葉があれば、どんな強敵にも立ち向かえた

カズマ（もう…俺には…）

今ではその言葉も心を乱すだけ

その言葉を貰う価値を

自分で捨てたのだから

うおおおおおおお！！
パチパチパチパチパチパチ！！

突然、店内に歓声と拍手が沸き起こる

どうやら

あのやる気のないアルバイト店員が
マナーの悪い客を頭突きで
ノックアウトしたらしい

料理を食べ終わったので、会計を済ませる五人
カズマの分はノーヴェ達が出し合った

会計の際

先程のアルバイト店員の男が
「またクビかあ。新しいバイト探さないと。」
と言って店を出て行った

その男が店を出ても、姿が見えなくなるまで
拍手と声援が止まなかった

ノーヴェsideout

くミッドチルダ・無人ビルく

カズマ side

カズマ「どうしてこうなった」

現在カズマは自分のアジトで正座中

左頬は赤く腫らした彼の前には
頬を染め、涙目でカズマを睨むウエンディ
やや怒り気味のノーヴェエが立っている

切札9：純一と元OLとアルバイト店員の男（後書き）

というわけで

ノーヴェのライバルはウエンディになりました。

今回はナカジマ家に行きます

ゲンヤさんの器のでかさをうまく表現できるか心配ですが
しよばい管理局1、2と違い
偉大なゲンヤさんをごんばって書きます

あと、この物語の真の悪を登場させます。
EXジョーカーの相手にふさわしい
悪にしていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9553z/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 紫紺の切札 ~

2012年1月6日01時51分発行